

径の血管腫の存在した症例と、(2)45歳男で左第1指起部の滑液膜肉腫の症例および、(3)55歳女で右第1趾の扁平上皮癌の症例である。症例(1)では血管腫の部も正常部と同様に、血管収縮剤のオクタプレッシンによって大きさも10%縮少し、カウント数の低下もみられた。症例(2)および(3)では腫瘍部はオクタプレッシンの静注によっても不変で、周囲の正常部の収縮により腫瘍部の正常部との対比が良好となった。

24. 3年以上に亘り ^{198}Au シンチフォットにより観察した肝疾患症例について

○山田 光雄 島崎 昭
青木 一夫 伊藤 秀明
(岐阜市・山田病院)

3年以上4年4カ月にわたり観察した慢性肝炎、肝硬変の症例にもとづき、経時的シンチフォットの所見がこれら疾患の経過観察の手段としていかに有用であるかを見るため肝機能検査と対比し観察した。

症例は男35例、女13例である、年齢は40歳から60歳にピークがあり、行った回数は4回が3例、14回が1例で8回から9回にピークがあり年2～3回の割合である。シンチの所見では肝右葉の肥大および縮小、左葉の肥大、脾の消長、骨髄背面よりの消長が経過観察に有意であり、これ等とよく平行したのは、コバルト反応右側反応、チモール混濁反応、A/G比であり、黄疸指数、GOT、GP Tは一致しなかった。上記シンチ所見の悪化につれこれら反応が悪化したが、今回はこれら所見の改善に伴い上記機能検査の改善する症例もみられた。

また中にはシンチ所見が著明で、肝の縮小、脾の出現等があっても肝機能検査ではまったく正常のものもあり、臨床所見に伴いシンチ所見が変化した肝機能ではさほど著変なき症例もあり症例をあげて説明した。

慢性肝疾患の経過観察にはシンチフォットの所見

は患者に苦痛を与えることなく、経時的に所見が得られ有用な方法である、なお38例中 Au 抗原は13例に陽性で、Au 抗原陽性で後に α フェトプロテイン陽性となり死亡した例は3年未満の経過でこの症例中に入っていないがこれら症例を今後経時的に追求し慢性肝疾患シンチフォット所見の終末を追求したい。

25. $^{99\text{m}}\text{Tc}$ -Millimicrosphere による肝スキンの検討

○分校 久志
(金沢大・核医学)
立野 育郎 加藤 外栄
(国立金沢病院・放)

$^{99\text{m}}\text{Tc}$ 標識肝スキャン用剤は種々のものが報告されるに至っている。我々は粒子サイズが比較的均一でしかも肝内代謝物質である点に着目し、 $^{99\text{m}}\text{Tc}$ -Millimicrosphere の作製を行い、基礎的、臨床的検討を行った。

標識はダイナボット製電解装置を用い、池田らの方法に基いて行った。標識後の粒子の凝集を防止するため、標識直後 pH を6～7に調整する点を改変した。以上による標識率は99%以上ときわめて良好であった。

肝機能正常例での肝ピーク到達時間は約10分であり、血中消失半減期は約66秒であった。静注後の経時的線スキャンおよび臓器カウントより臓器半減期を求めると、肝328分、脾189分であった。肺への取り込みは見られなかった。約20例において、スズコロイドとミリマイクロスフェアにおける肝脾集積比の対比を行った結果、脾への取り込みはミリマイクロスフェアで著明であり、比較的良好な相関が得られた。また、各種肝疾患群における肝脾集積比では、肝硬変群、肝腫瘍群で明瞭に正常群と分離したが、その他の疾患群では正常群との明瞭な分離は見られなかった。

以上より $^{99\text{m}}\text{Tc}$ -Millimicrosphere は脾の描出が明瞭で肝脾スキャン用剤として有用であった。